

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 梶山 祐治

本論文は、20世紀ロシアの詩人・小説家ボリス・パステルナークの代表的長編『ドクトル・ジヴァゴ』について、そこに見られるいくつかのモチーフの機能を分析することを通じて、作品のプロット構成を解き明かそうとした研究である。著者は『ドクトル・ジヴァゴ』へのナラトロジー的アプローチに関する最新の先行研究を踏まえ、これまで十分に検討されてこなかったモチーフを4つ取り上げ、順次詳細に分析している。

第1のモチーフは「火、空気、大地、水」という自然力（ロシア語でいうスチヒーヤ）である。パステルナークの作品において自然が重要な役割を果たしていることは多くの先行研究によって指摘されているが、著者は自然に関わるモチーフが具体的にどのようにプロット展開のために機能しているかに着目する。

「火」は砲火、戦火であると同時に、精神的な価値を照らし出す明かりでもある。「空気」は欲望を表現・伝達し、登場人物を結び合わせるとともに、創造空間の象徴ともなる。「大地」は空気が不在である地下世界のイメージとして機能し、登場人物の運命と結びつく。そして「水」は創造の過程の表象としても、変化する関係の表象としても機能している。

第2のモチーフは「未来」である。著者は「未来」という言葉の使われ方を丹念に調べ、それが初めは肯定的な意味合いで使われているのに、次第に否定的になっていくことに着目し、この意味の変化そのものが、ユートピア・アンチユートピアの両方を両義的に孕んだ小説の独自の時間感覚を表していることを論証する。

第3のモチーフは「演じること」、より広く言って演劇的モチーフである。この側面はこれまでほとんど正面から取り上げられなかったが、著者は『ドクトル・ジヴァゴ』以外のパステルナークの散文作品も援用し、またハムレットとの深い関係を論じながら、この長編のプロットの根底に演劇的な世界把握があることを指摘する。

最後の第4のモチーフは「父と母」である。著者は戯曲『盲目の美女』も併せて分析しながら、存在感の稀薄な父とその希薄さを補う母の強いイメージを確認するとともに、父と母の不均衡が、最後に旧約聖書的な父のイメージによって補正されていると結論づけている。

ただし、これら4つのモチーフ群の間の有機的な関連や、モチーフからプロット構造へと至る筋道について、小説全体の視点から解明することは今後の課題として残った。プロット、時間、演技といった基本的概念の扱い方にも、さらなる検討を要する点が散見された。とはいえ著者は、すでに膨大な先行研究のある作品について参考文献を博搜したうえで、難解な小説のテキストそのものを緻密に分析し、これまであまり着目されなかったモチーフが果たしている様々な役割を明らかにし、小説の多面性、多層性を再確認することに成功した。精力的な調査と創見を多く含む分析に基づいた研究成果であり、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に相応しいものと判断する。